への想いがつのっていったんです。

父へのレポート

故郷（ふるさと）へのあこがれがあんまりつのって小学五年のとき父へ、〝家族は熊本へ帰るべきだ〟と、いくつかの理由をあげてレポートを書いたんです。五年生ですから親の職業とかまわりのことは、ぜんぜん考えていません。まったく自分中心に考えましてね。自分は体が弱いので、風光明媚の地に住みたいと、また、将来作戦参謀になりたいので世界最強の六師団がある熊本に住まねばよりよい軍人になれないなどの理由をあげましてね。当時、第二次世界大戦に突入してましたので、特に感じたのかも知れませんが、熊本の土壌でしょうけど文武両道と言いますか、そういう熊本の人達に誇りを持っていて帰りたくてしかたがなかったんです。地理の時間等で阿蘇がでてくると、胸がジーンと熱くなってくるんです。こういう気持は熊本で育っていたらなかったかも知れませんが……まあ、レポートは出しましたが一しゅうされました。

転　校

中学は大阪の今宮中学に入学したんですが、空襲が激しくなり、二年のとき白水村に帰ることになりました。期せずして、レポートで要求した結果になったんです。それでどこに転校したかというと、従兄弟達なんかみんな大津中学へ通っているものだから必然的に大津中学に転校したんです。そこで同級生の剣道の強いのに驚きました。私も体が弱かったせいで、小学五年のときから剣道を習っていて、大阪の中学では、同級中一番だったんです。ところが大津中では、ほとんどの同級生が、私より強いんです。どうしてだろうと思って、話を聞いていたら、小学校入学時の剣道の試合なんかの話をしているんですね。これじゃかなわんと思いましたよ。また、練習の仕方が違いましたね。気合の入れ方、腰の入れ方、竹刀のしぼり方、練習熱にしろ、ぜんぜん違うんです。熊本は現在も少年剣道が盛んで、全国優勝をしているみたいですね。このままがんばってもらいたいですね。それと、もう一つ転校時の思い出があるんですが、学校に消しゴムを持ってくるのを忘れたんです。それで隣の机の人に「消しゴムを借してくれないか」と言ったんです。消しゴムを小刀で半分に切ってくれるんですね。大阪ではかしてくれなかったし、同級生は受験競争のためみんなライバル、敵ですよ。人生観が変わりますよね。熊本は何て人間がいいんだろうというふうに。熊本ではこういうふうなことにたくさん出合い今もなお、その連続です。

流行歌

白水から大津まで汽車通学したんですが、汽車の中で先輩が、「赤い花なら曼珠沙華……」と、長崎物語を歌っているんです。そのとき異様な感じがしたんです。「我は海の子」とか、「ふるさと」、「おぼろ月夜」などしか歌ったことがないもので、聞いていて非常にけだるい感じがしたんです。人生のうえで、聞いたことのない異質の音楽を聞き、このとき音楽に興味をもっていたんだなぁと思いました。先輩、〝その歌教えて下さい。〟……と。

一度歌ってもらうとすぐに覚えたので、これには学友達もびっくりしました。次いで「誰か故郷を想わざる」、続いて数十曲を即マスターし、一躍、学友間に於ける流行歌の先生になりました。

通学列車が、グラマンの機銃掃射を受けるとき以外はほとんど歌っていました。従姉が口ずさむ「五木の子守唄」に感動を憶えたのもこの頃でした。

ナナメの関係

この頃、親子断絶なんて言いますが、この言葉なんか非常にぜいたくに聞こえます。親子の情愛というものは、切っても切れるものじゃないでしょう。どういうことでしょう。私達の時代は父親は怖い存在で気やすくものも言えなかった。今は民主々義で思うことはなんでも親に言えて良いでしょうけど、また話し合えることは大切なことですが。でも親父のあまり威厳のない姿はみっともないでしょう。昔はお婆さんも、伯父さんも怖かったし、そのなかで伯父さんから勉強をみてもらったり、お婆さんからいろんな話を聞いたりした。しかし、今、私達は甥や姪に全然かまいませんね。私なんか親父の目前で伯父やお婆さんから怒られ、また、親と一緒になって怒られたものです。

この伯父、甥というナナメの関係、これが現代社会に必要と思うんです。

〝カルメン〟

大津中学卒業前三十日で、ある事情で九州学院に転校したんですが、それを期に益々音楽熱に燃えました。その頃の師は隣に住んで居られた大宮福子先生でした。この先生から勧められ、熊本歌舞伎座で「藤原義江」「川崎静子」の「カルメン」を観劇したんです。観ていて、血湧き肉踊るんですね。ビゼーの音楽がいいんですね。それに川崎静子がバラの花をくわえたりして、とうとう興奮おさまらず三日間通いました。このとき、劇作家になってオペラの脚本なんか書こうと思い立ちました。それで度々上京しオペラを観てまわりましたが、すべて不思議に面白くなかった。ミュージカル映画も殆んど観ましたが、あまり感動しませんでした。以後、「森繁久彌主演〝屋根の上のヴァイオリン弾き〟」に感涙するまで劇音楽を認めませんでした。

熊大では、国語を専攻してましたが殆んど勉強せず、楽団を結成し、一行十六名を引率して、県内各地の児童生徒に生の音楽を聴かせる……と見せかけて、夜は軽音楽の興業をし収益を上げたり、また、神聖なる大学講堂でダンスパーティー（教授間に賛否両論あったのが面白かった）を催したりして再び退校処分寸前までいった。

民謡は土の香り

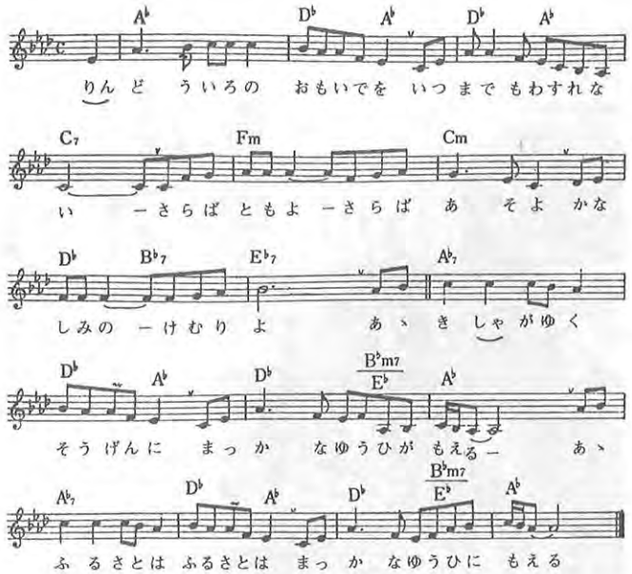
熊本大学を卒業すると二年間中学教師をしましたが、父の「好きな道を自由に生きることが何よりの幸福である」「一

夕陽よ恋よ故郷よ

作詞
作曲　岩代　浩一

1．りんどう色の思い出を
いつまでも忘れない
さらば友よ　さらば阿蘇よ
哀しみの　けむりよ
ああ汽車が行く草原に
まっ赤な夕陽が燃える
あゝ故郷は故郷は
まっ赤な夕陽に燃える

2．藍より青い天草の
あの島に君が居る
この季節　この青春
限りない　よろこび
あゝ汐風に酔いながら
まっ赤な夕陽が燃える
あゝ故郷は故郷は
まっ赤な夕陽に燃える



途に続け得るかが才能の有無」等々の言葉に励まされ上京し、松本民之助先生（芸大教授）に、音痴とののしられながら四年間も可愛いがられ、また、パリから帰朝された島岡譲先生（芸大教授）に三年間鍛えられました。

齢三十にして無職、やがて私を過大評価してくれるプロデューサーと出合い、はじめての仕事が、「立体音楽堂」というNHKラジオの編曲です。このとき商業音楽に興味をもち、次いで「歌の広場」（NHKテレビ）で多様化された大衆音楽のツボを学び、「若い民謡」（NHKテレビ）を楽しみながら、土の哀しさ、土の暖かさ、日本の香りの味合い方をおぼえ、これからの課題を決意したわけですが、やはり民謡は土の香りですよ。心を歌わなきゃダメです。民謡歌手というのは、その地方地方にいる素人の方が素朴で旨い。

〝昼の民謡〟でレギュラー出演していたのが当時おさげ髪の葵ひろ子ですが、九州の民謡を誰よりも上手に心をこめて歌うのは彼女でした。また、〝五木の子守歌〟を歌わせたら抜群ですよ。彼女は自分の足で何回も何回もその地方に行き勉強して自分のものにしたのですから。

森繁久弥さんには非常に親しくして頂いているんですが、近年ヒットした「火の国旅情」も森繁さんが非常に気に入って懸命に応援して下さいました。知床旅情の関係で銅像が立ち、その除幕式の日に、〝今日は知床の皆さんに新しいとってもいい歌を教えます〟ということで、同行していた俳優の竹脇無我さんに音頭をとらせ、そのために北の涯で、なんと「火の国旅情」の大合唱がわきおこったそうです。

手作りのコンサート

熊本に帰ってきますと悪ゴロ時代の同級生なんかが、「岩代、むずかしか音楽ばかり作らんで、もちっとやさしか歌も作れよ。」と言うんですね。私も大学の教授から小学生まで、そば屋のオッサンに出前もち、老若男女を問わず、皆んなが楽しめるそして感動する手作りのコンサート、これを創りたいんです。

私は県の観光フェスティバルには、非常に興味があり、また期待しているんですが青写真、オリジナルがないように思います。将来に向かって、青写真をつくりサンレモの音楽祭に匹敵するようなフェスティバルにしてもらいたいですね。サンレモだって一朝一夕にできたわけではないし、今、いろいろ模索中と思うんですが、非常にいい企画なので、一年や二年でやめてほしくないですね。これからは、観光協会、商工会、農協とか、とにかくあらゆる団体、そして県民、県出身者が一丸となりこれの成功に向かって進むべきと思います。観光フェスティバルも観光の二字をとってしまえばいいんです。クマモト・フェスティバルとすれば色々な意味で幅が出て来ると思います。

クマモト・フェスティバルの価値を高め、全国から、そして世界から注目される様になれば観光の役目も大いに果して行くと思います。